

当病院で活動されているドクターに、各専門分野での取り組みや、医療への想いを語っていただきます。



総合内科 医員

vol.15

水野 隆史 みずの たかし 先生

専門：総合内科

得意分野：訪問診療

——先生は、官僚としてキャリアを積んだのち還暦で医師になられたということで、その異色の経歴や現在の活動が何度もメディアで取り上げられていますね。先生が医師を志した理由や、当院に赴任されるまでの道のりをお聞かせください。

私は兵庫県尼崎市で生まれましたが、半年くらいで福井県三国町に引っ越し、その後高校卒業までそこで暮らしました。尼崎には小さい頃何度か行ったようですが全然覚えていないので、出身地を聞かれると、だいたい福井県と答えています。その後は、東京で浪人生活1年を経て東京大学に入学し、4年後国家公務員上級甲種試験（古めかしい!）に合格し、卒業と同時に農林水産省に入省しました。その後は、優秀な上司や部下に恵まれて厳しいながらもやりがいのある公務員生活を送っていましたが、49歳の時赴任先の金沢で、偶然ふと目にした新聞記事で、ある女医さんを知りました。普通の主婦が50歳頃に医者になることを目指して苦労の末55歳で医学部に合格し、記事掲載時には62歳で研修医として頑張っているという内容でした。この人をこの記事で知ったのを契機に、その後の生き方を真剣に考え、第二の人生として医師として人の役に立つために医学部を目指すことを決意しました。まさに、「人間は一生のうちに会うべき人には必ず会える。しかも、一瞬早過ぎず、一瞬遅過ぎない時に」（森信三）でした。奇しくも私も医学部入学まで苦難の5年間を要しましたが、なんとか55歳で金沢大学の学士編入学試験（医学部以外の大学を卒業していることが受験資格で、試験に合格すれば3年生のクラスに編入される）に合格しました。入学後は、30数歳年下の同級生と机を並べて講義、実習に明け暮れ、体力・記憶力の低下を自覚しながら苦難の4年間を経てなんとか59歳で卒業しました。しかし、医師国家試験に落ちてしまい1年間の浪人生活の後、60歳でようやく医師免許を取得しました。そして、大学5年生の時に見学に来て以来、初期研修はここで受けようと思っていた中央病院に赴任しました。そして、初期研修終了後も引き続き中央病院に総合内科医師としてお世話になっています。



↑青森朝日放送(ABA)制作ドキュメンタリー「還暦で進む医師の道～人生100年時代の選択～」が2021年度ギャラクシー賞テレビ部門奨励賞に選ばれたことを伝える記事

——十和田市に赴任前はどんな印象をお持ちでしたか？また、住んでみて印象は変わりましたか？

先ほど申し上げましたように、大学5年生の時に、病院見学のために金沢から車で約12時間をかけて十和田に来ました。官庁街通りをはじめとして随分綺麗で整った街というのが第一印象でした。病院前の通りは、日本の道百選に選ばれていることを知り納得しました。実際に住んでみるとスーパー、コンビニ、ドラッグストアが充実していること、災害の危険性が少ない地域であること、人通りが少ないこと(車での移動が多いから)など大変気に入っています。

——先生が医師として取り組まれていること、標榜されていることは何ですか？

① 訪問診療、②総合内科、③禁煙外来です。もっともウエイトが高いのが、①訪問診療で、現在、附属とわだ診療所の所長を兼務して取り組んでいます。十和田診療所は、中央病院による訪問診療の機能を強化・拡充することを目的として令和元年10月に訪問診療専門の診療所として開設されています。診療所は、患者さんが住み慣れた環境で生活を続けたいという思いや、最後まで家族と一緒に生活したいという思いが実現できるよう、ケアマネージャーさん、訪問看護師さん、薬剤師さん、ヘルパーさん等と連携を取って、寝たきりなどにより自宅や施設からの通院が困難となった患者さんのところへ定期的に訪問し、診察、処方等を行なっています。なお、訪問診療の対象となっているのは、医療機関への通院が困難で、原則、診療所から半径16km圏内に居住されている患者さんです。なお、診療所の運営に当たって考慮しているのは次の5点です。

1. 独居でも、高齢夫婦でも、治せない病気になっても、障害をもっても、住み慣れた地域で療養できるよう支援すること。
2. 何でも歳のせいにはせず、治せる病気を見逃さないこと。
3. 病気による身体的苦痛や精神的苦痛をできる限り軽減すること。
4. 患者さんの生活環境などにまで関わりながら、病気だけではなく心にも向き合うこと。
5. 人はいつか必ずこの世から旅立つ存在であるという厳粛な事実に向き合うこと。



——研究されていること、勉強されていることがありましたらお聞かせください。



先ほどお話しした、現在取り組んでいる業務のうち、②総合内科や③禁煙外来では、ほとんどの場合、最終的には疾患が治癒して診療は終わりになりますが、訪問診療で診療の終わりは、ほぼ100%患者さんが亡くなってお看取りをさせて頂き終了となります。このように病院での診療と訪問診療では診療の終わりが全く違います。そんなことから、近年は、人間の死、魂の存在、あの世の存在、輪廻転生などにも強い興味をもって、関連する書物を読んでいます。

—お休みの日は何をして過ごしますか？趣味はありますか？

若い頃は、パチンコ、競馬、競艇にのめり込んでいました。競馬中継をイヤホンで聴きながら付き合の麻雀やゴルフをしたりしていました。年齢を重ねるにしたがい負けも込んできて、だんだんとやらなくなり、興味も薄れていきました。一方で、歌舞伎や演劇を見たり、都内散策（都営地下鉄と都営バスの休日共通1日券を使って都内を安価に移動）が趣味となりました。10数年前からは、受験勉強を始めて時間的余裕もなくなってきたので、趣味は1ヶ月に1回くらいの洗車、ワックスがけに変わりました。十和田に来てからもこれは続けていますが、雪の季節には雪どけ水の跳ね返りのため、走ったあとの車の汚れは半端ではなく、最近では雪や雨が降る中で、毎週家で洗車に勤しんでいます。周りの人からは変な人と思われていると思います。

—特技はありますか？

特技と言っても、特にありませんが、あえて言えば珠算1級を小学校6年生の時にとったことくらいです。父親が週1回自宅で小学生相手の算盤塾を開いていた（父親は地元高校の商業科の教員。私もその高校の普通科に通いました。）ので、そこに無料で参加していました。算盤の2級を持っていれば算盤塾を開けるぞ、と父がよく言っていたのを覚えています。ちなみに父は、私が19歳大学1年生の時に56歳で急性心筋梗塞により亡くなってしまいました。一緒に酒を酌み交わすこともなく、何の親孝行もできなかったことを本当に残念に思っています。

—日々の診療で心がけていることはありますか？

私は今年68歳になりましたが、医師になるまでの60年間は患者側の人間として過ごしてきました。その間に感じた、病院や医師に感じた感情等を思い出しながら、自分がその患者さんであったらどう思っているのだろうか、何を期待しているのだろうか等、医師と患者の立場を置き換えて考え診療に当たるよう心がけています。



—最後に市民の皆さんへメッセージをお願いします。

（選挙公約みたいですが）十和田市民および周辺市町村の皆様のお役に立てるよう今後とも努力して参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

所属学会：日本内科学会、日本プライマリ・ケア連合学会、日本病院総合診療医学会

資格情報等：ACLSプロバイダーコース取得、TNTコース修了、嚥下機能評価研修会修了、認定産業医研修修了、訪問診療研修修了